

貞丈雜記

十五下

五三〇番

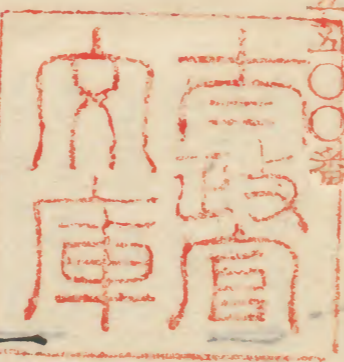
庫文閣内			和 第 七
一五三函	一四二冊	和書類	
一七架	三二二號		

庫文官政太			和 書 門
	一〇	二	
三二冊	一三八函	二	

内閣文庫	
番號	和 11422
冊數	32 (30)
函號	153 287

豊
刊





物数之部

明治十二年購求



祝儀は七五三の数を月より一三五七九を陽数といふ

二四六八十を陰数といふ陽ハ物を生ずル成をせしむ

氣之陰ハ物をかろかす氣之依之祝儀ハ陽數

を用之陽數の内初の一と終の九を括て中の七

を二ハより四ハハ陽氣の七の九ある所を取リ用ハ心

也物の初ハ一ハ終ハ九ハ依之初の一と終の九を

除く之

一 神道は八の教を以て教多き儀と云ふ事より十の

天地の間の氣の
此の氣を陽
といふがまじ
氣を陰といふ
より出止氣を
陽といふは氣を
有氣を陰といふ



内初の二と後の十とを括て残り数分の始もあはれ
もあはれかぎりあき心へ八百万八千代八雲あとの八の字
皆限りあはれ数あき後あり

折一合と云は二のするごとく心持する人をおやうあり
了のするごとくもあはれ物を一合二合と云へ唐櫃
あはれ一合二合と云一ツ二ツのするごとく合ハ盒の累字
之盒ハもことと云ふなり

一具と云ハ何れをも對し掛ひたる物を云ゆけ行
膝もあはれ袴肩衣もあはれあとの数ハ一具と云
桃子テウシをバツと云二枚と云へ条へ少許あり

一鞍クラ古轡クラハ一口とあるをひとくちと云ふハあはれいづくと
よむべし上古の書ハ太刀の首をも一口二口とあり又

種一口鈴一口あはれもあはれいづくとよむべし
禮ハ一領と云禮ふかぎらず小神をも一領と云へ領を

名をよむ字へ名をのけるものハ皆一領と云へ
胃カブトヒトコ一劔と云ハ敵の胃を云劔ハ武新書札篇云胃

一劔をぬと云ふもさるる云ふる云へ劔の字ハ首を劔
るの字へ依り身方の胃をバ劔と云ふをいふ一頂と

いふ一頂いふと云ふも真衡の祝之世と一頂
といふを知らぬ人なり

節用集胃一
劔此字ハ忌テ
不書也

殿中日記云詰
奉公山田より尺
奉公山田より尺
奉行方を奉公
礼と云山田氏也
在仁別祀云雜堂
船二鯨ト云奥
一尺斗ナルガ飛入
ケリ疎忽ナル者
取テ海一投入ケレ
バ暫有テ鯨一尺
飛入ヌ云是ヲ
見レバ鯨鯨ニモ
限ラズ一尺ト云

一尺二尺の多軍
存す出まて不
ろくとハ弓強
のふく二あら
と云ハ二張の弓
之とあり是を
弓杖を赤附の
百と

一 鯨サテふかざうて一尺二尺と云ふあまず大草殿お傳多
書よ鯨一志やくと何り一尺二尺と云いそれつむびらう
あまず一尺以上の魚の大なるをバ一尺二尺といふれ
又云鯨を一尺二尺といふハ一隻シヤウの音をうて云あまず
と云尻あり隻の字ハかつくとよむあまず一隻といふ
ハ一ワの字ハ鯨サテかぎうて一隻といふわけもあつ何れも
すの字をハ一隻といふべきもあれバ尻も用かつ按
じらよあまず祀をぬく大草院の書ハ鯨を一尺と
いハ鯨も鯨も奥州より出る奥州かの國の初を云
て奥を一尺二尺といひ習うて鯨鯨を他國へ送るも

一 尺二尺といひてつのはたる他國をともす初をうけ
て一尺二尺といひ習うたるあまず一尺ハ昔奥州の國初より
出するあまず
弓ハ一ちの二ちうると云り弓のけづり人並をあまず
不くとにぎうて一極を一ちうると云り馬秘流出れ
雜書抄書あり
弓を一ちの二ちうると云り一杖二杖と云るとハ大草院
抄書よまると國害記よんをう一ちうると云いをがし
弓を射揚る揚あどのる教をうり耐弓ば元一杖と
云りを一ちうると云く

一 たうぶらう「おのうたうげらう」の手の定まらざる調度
の教りともあらず

一 物の寸尺を定むるに音の陽教を用べし
を引べし陽教ハ一三五七九之陰教ハ二四六八十之又音の
とハたとハ二丈四尺とすも亦おも是ハ陰教あり一寸の
又一分う三分も併計をせしむるは陽教を用むる
凶ありしとハ三丈五尺とすも亦おも是ハ陽教あり百
二寸又二分四寸も併計をせしむるは陰教を用むる心
陰陽の教を引けて用むる音の吉凶をわらざる
ハ礼あり

節用集云弦
廿筋曰一桶七
筋曰二張一フハ
曰一筋也ト見ユ

一 酒一献二献一度二度と云るは酒盃の形に記す

一 弓の弦ハ一條二條と云又一筋二筋とも云一弦と云ハ
七筋を云一桶とハ廿一筋之桶と云ハ引け物之下の
引け物ハ廿一筋入て途上を引て替弦を上古ハ副弦
とも殺弦とも云

一 弓は不をハ了すと云べし不不とハ石云

一 墓目一腰と云ハ弓の弓の犬追おの寸の弓の
云々云々一束とハ廿の弓の廿一以上ハ廿二束と云々
引又異統ハ一束とハ四十の弓の引一把とハ廿一の
弓之是仁田右馬助の祝之射也方寸を引るは祝

用ひて

一 矢二枚を一子と云ふハ的矢はかぎりたる事の外
矢をバ一子二枚といひの事しき一ツ二ツ一ツ二ツト
と云べ一但一子四目一子神以てハ一子一ツト
ふれバ一子といふべ

物の数の云種武雜書札道照愚考はありある畧之
保侶衣をバ一領二領と云保侶衣一子領と二代家祿より
考教をバ一杖二杖と云考教ハ祈禱の札也 又一葉と云之
涉後をバ一合二合と云まづてはあは入るおが 一合二合といふ事あり 古案あり
勢也書札案あり大永五年の 古案あり

考の教をひと物と云ふハ物の数は限りたる事

外の考よりいふべしと云はれと云はれあり外の考ハいふ事

一 靴子をバ一履と云二枚と云ひはけをバ一口二口と云べ一又

靴子をバ一口二口といふ事

一 小袖一重と云ふハ小袖の款よりいふ事

一 厚風かきと云ふ事保氏考云々 又一隻と云ハ一羽

一 衣ハ一羽と云色ハ唐記ハ一羽と云一頂と云べ一

一 箆をバ一ツ二腰と云保元物語ハ是を云

一 雲又ハ腕臂の款を一挺二挺と云ハ挺ノ字ハつ元と

一 一ツ字ハ墨もらうの事も杖のこも細き物あり

一挺二挺と云く何れも亦も七き物を一挺二挺と云
ハ皆同じ心一丁二丁と云ハ挺の字むづりしき也
略して挺の字の代り丁の字を修りよ用れり

一輿コシあを一丁二丁と云ハ丁ノ字あると云む字あり
一人あて二人あてと云む一人す二人すと云む
一布ヌノキヌ縮あどの敷一疋を一匹と云又一むらりいづくれあの
いづく字拾遺物語七卷布一むらりいづくれあの

男よとらせよ畧中は布一むらりいづくれあの男あをす
あり不得と云りと思ひて云く日本記孝徳天皇
大化二年記田一町
縮一丈四尺成疋ムラト云くは疋ノ字ムラと云む

一綿ワタイクドン敷屯と云屯の字ありむると云心軍陳の人敷を
屯すると云月人敷を集るを云綿一屯の時ハひと
ちりと後之儀名抄又唐令云縣六兩ヲ為屯屯聚
也倍ニ一屯ヲ後疋ヒ度毛トモ遲チト

一晝夜の時の敷をおろす晝六時夜六時子の時を才一と
く屯の時を才二とく寅の時を才三とく卯の時を才四
とく辰の時を才五とく巳の時を才六とく未陽の時を
午の時を才七とく申の時を才八とく申の時を才九とく
酉の時を才四とく戌の時を才五とく亥の時を才六とく
是陰の時を時敷をおろすの一時を十の敷又定て

才一の時をバ一をうづびくは残里九のをあへ子時 才二の時
 をバ二をバおどくは残里七のをあへ巳の時 才三の時をバ
 三をあどくは残里七のをあへ卯時 才四の時をバ五をあ
 ぶくは残里五のをうづ辰時 才五の時をバ六をうづび
 しくは残里四のをうづ戌時 才六の時をバ六をうづび
 ぶくは残里四のをうづ酉時 才七の時をバ七をうづび
 ぶくは残里三のをうづ戌時 才八の時をバ七をうづび
 ぶくは残里三のをうづ亥時 才九の時をバ八をうづび
 ぶくは残里二のをうづ子時 才十の時をバ八をうづび
 ぶくは残里二のをうづ丑時 才十一の時をバ九をうづび
 ぶくは残里一のをうづ寅時 才十二の時をバ九をうづび
 ぶくは残里一のをうづ卯時

言語之部

言語のこゝろを知らざれば書を
 読めども心持かききるあるに似たり

何ういふと云ふ殿の官殿の殿りて居飛の多ういふの居飛
 をあへる人神ありやうやまひて何ういふ殿と云ふ
 たとへば右神官八幡字あどの字の字の心之海人
 藤友云於内裏殿ト申ハ執柄家之外不可有之
 関白殿ハ意兼ハ其攝政殿何事ヲ申サル、其於此
 申スニ諸人無異也親王ヲバ於此前何殿トハ
 不也

何ういふの扱上古ハあきくろくノ京於將軍時代也

事上古の法之、京師將軍時代より中比より版文等
を付てよび、あま、旧記は善法寺版聖徳院版
之、空院版、実相院版、あま、あり、本式ハ版文字あり、
ト、ま、ま、あり

昔ハ祝儀のさよハ病氣と云ふを福と云ふ、
て、歡樂といひけり、昔ハ祝儀をさよ、
詞や、さよ、さよ、さよ、又祝儀あり、
ま、ま、歡樂といひ、趣旧記は、
依然、歡樂、不、不、不、不、不、不、
同、同、同、同、同、同、同、同、
寛正六年正月
十四日之条
版中ハ一献
如例檢校
教軍同儀
入夜松涉庭

東鑑卷三十三云
嘉禎二年丙申
正月十一日巳未
晴、挽飯、
今日不被上法
蓋、依、
出、之、故、也、

和難能立、昨夜、
始、歩、何、
輔、及、細、川、右、馬、
樂、と、書、て、
心、之、
具、合、
画、
具、か、
等、も、

今時人の兄をあたきといひ伯父ををぢきあぐらる
阿にきこをちきみといふ事をこの字を畧して云ふ古
ハ兄君伯父君あぐらひといふ

一 かにごあそごおぢこおぢごあぢのぢハ所のまじや
まひて清と云ふ清ハ清前を畧したるこあよはあ
祿也あといふ一説はあにごあぢのぢハ所のまじと
いふあやまうこ父也あ母也ああ母也ああ母也ああ
ま同音よりあり

一 父の字を母のハおやおや人又おや志やまのといひ母の字
を母じや人といひ兄の字を見じや人あぐらひといふこを

世の人父の字をぢと云ハおぢや人と云ふ字を略して
おぢと云ふ

又伯仲叔季ト
云事アリ伯ハ惣領
ナリ仲ハ二男ノ叔
ハ三男ノ季ハ四男
也伯父仲父叔父
季父ト云モ以事
也又ノ三ハソノ身
ヲ叔父ト云四ハソ
ノ身ヲ季父ト云
父ノ兄ヲ伯父ト云
ヲ也

一 おぢの字を伯父叔父といひおぢの字を伯母叔母と云ふ
伯ハあまともむ叔ハおとよむとされバ父の兄ハ伯父
父の弟ハ叔父又ハ父のあそハ伯母又ハ父のいもハ叔母
母の兄也もおとよト近世又盲あ人伯叔の字け
をあぐらひして父方のおぢおぢを伯父伯母と云へ母方
のおぢおぢを叔父叔母と云へる人ありあやまうこ
難合期又不合期あぐら 舊記はあハるああぬと
いふことあり

一 抱忘と日記はあるハ物終る所のつらいつゝたゞし

一 仕合悪むと日記はあるハちやうど能くといふおを志ある
まじりのあつぬをさし不韋の心しんか

一 難有ゆと日記はあるハ是ハ必するハ多クハあまし

一 多由神と日記は阿ハ多物神之今時の朝またいも
なつと云ふ同いむおそれる心ハあま

一 比真と云ふ日記は阿ハ比真といふハ比真と云ふ
昔ヨリ此比ノ字ヲ用レ且本ハ比ノ字ニハアラズ
比真と云ふ日記は阿ハ比真といふハ比真と云ふ
を引用をす

一 尋常といふ日記は阿ハ尋常といふハ尋常といふ
と云ふハ何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
人のめもつとすハいづんあまを尋常といふハ尋常といふ
ても何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
尋常といふハ尋常といふハ尋常といふハ尋常といふ

一 尋常といふ日記は阿ハ尋常といふハ尋常といふ
と云ふハ何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
人のめもつとすハいづんあまを尋常といふハ尋常といふ
ても何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
尋常といふハ尋常といふハ尋常といふハ尋常といふ

一 尋常といふ日記は阿ハ尋常といふハ尋常といふ
と云ふハ何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
人のめもつとすハいづんあまを尋常といふハ尋常といふ
ても何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
尋常といふハ尋常といふハ尋常といふハ尋常といふ

一 尋常といふ日記は阿ハ尋常といふハ尋常といふ
と云ふハ何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
人のめもつとすハいづんあまを尋常といふハ尋常といふ
ても何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
尋常といふハ尋常といふハ尋常といふハ尋常といふ

一 尋常といふ日記は阿ハ尋常といふハ尋常といふ
と云ふハ何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
人のめもつとすハいづんあまを尋常といふハ尋常といふ
ても何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
尋常といふハ尋常といふハ尋常といふハ尋常といふ

一 尋常といふ日記は阿ハ尋常といふハ尋常といふ
と云ふハ何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
人のめもつとすハいづんあまを尋常といふハ尋常といふ
ても何れを尋常とも云ふハ尋常といふハ尋常といふ
尋常といふハ尋常といふハ尋常といふハ尋常といふ

良の尺素往来より面々出立可也折花の中兼及はあり
 未鑑卷世嘉禎三年二月二日ノ条ト出俊又殊被刷カイワシク
 供奉人清撰各行粧殊折花太平記卷三主上笠置
 法没落条云同十三日小新帝登極のよしして長持堂
 よりだり入らせ給ふ供奉の法々花をおそ行粧引つらふ
 一 雑事新役新用かとの雑の字をくくるといふしと種々
 と書ともくくるといふし即雑の字のむくくといふ
 をと江戸の初よりいふくといふ又くといふといふ
 とまきあり
 一 キヨイ 湯を待つと云ふ人のあひ入料管を待つといふこと

古き状の葉文は披流状の書とあつたこと
 といふ言あり是に向の奏者小心をこめて披流を
 頼といふむして此意をばなすといふこと此意といふ作
 云ふよあふ茶と母の美人の此初を此意と心持りの
 あやまりといふ意の此らといふ美人の此初をば古の流チヤウ後
 とのひくといふ意といふも此方の此らといふ作の意のあは
 一 人唐記ふたふだの形行といふ言ふたふたといふたを
 け志のふく大久保彦左衛門忠教の家記より
 東照宮流立版ありてたふくといふ作ありるえといふ
 昔よりの初といふ言集田飛田似麿香物之人撰麿香

一 涉の字ハ元來天子の涉車斗ハ涉の字を付てこれを
 にあざむくハと云べしと世人の多クハ涉の字を付ていふ
 涉の字ハ馭の字と同じ字と見むまの事ハよむ字あり
 天子ハ馬を自由自在ニ乗らまはせ給へて天下の人を
 自由自在ニつらひ給へ給へ涉の字を付てさへ涉の字
 をおさむるハと云ふん處ハもよむハめしつらむる事
 今武家の供の者先はまて乗言ハばつとさへ上古の
 警蹕ケイヒツの餘風ハ警蹕の多クハ官位の新ハ記し給へり
 今みえ考べし ケイヒチト
ニゴラズニヨムシ ヨムナリ
 一 せんあれ又せんあれと云詞日記ハありせんあれが

ことあるなれと云ふハせんあれハことあるのれと云ふ
 ことせんあれと同意したと云ふハせんあれと云ふ
 中ノ多クことあるあれと云ふハこの字にづいて後ハあり
 あんあれ又あれと云詞日記ハありありあれと云ふハ
 おんとあありと云ハ燈籠の多クハ大坂城と云ふハ
 涉殿の多クハ火と云ふハ
 料理と云詞今ハ食物を調うらゆる事と云ふハ
 食物ハうりに味をす何れともとりまうらゆる事と云
 理と云ハ料理の字ハけと云ハ訓ハ理ハおとむる事
 訓ハ何れともと云ふハと云ハおとむるハ料理と

之へ食物を調ふる。食物を取捨つるひとのかたむ
ゆへ食物を料理せらるるを食治るがごとく料理と云
ふはあらざるべし

一 拘惜クシヤクと云はれ古書は「クシヤク」と云ふ字に「クシヤク」
むるを云ふ意のこゝに「クシヤク」と云ふ

一 押留ヨウリウと云はれ古書は「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」

古書は「ヨウリウ」を「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」
も「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」
字也すも「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」
すも「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」

一 「ヨウリウ」と云はれ古書は「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」

一 「ヨウリウ」と云はれ古書は「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」

一 「ヨウリウ」と云はれ古書は「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」

一 「ヨウリウ」と云はれ古書は「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」

一 「ヨウリウ」と云はれ古書は「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」

一 「ヨウリウ」と云はれ古書は「ヨウリウ」と云ふ字に「ヨウリウ」

一 されごとくいたまはれりといやしき詞の志やれりといふは
 目しされごとくいふは詞源氏物語外古書あり
 一 そげいふは舎人と云ひ枕草紙ありといふは
 されやうたるをさへと抄物よをさう
 一 園クダの子を古書は孔子クニと書らるあり又定家卿の明月記
 にもあり又室町記にも有園と書らるはともあり
 孔子とありを園の字とむはされが古書をよまるとむは
 ず不審あらむれを是を記し
 一 白状と云る書れの部は記さ
 一 陳チと云る陳の字のつらむは字に何よりとむ

源氏物語の宴
 の美まといふも
 ありいふも又こを
 つくの美ま今
 こそかみひかたり
 んへいものあれ
 又あさこの花
 ちとあくも
 あんへいお又ち
 幸の老よきき
 ありあへいさき

一 におもむるを思ひひのつらむは陳とむは
 て能き事にいひさきつらむはつらむを陳とむは
 悪むをいひつらむは陳とむは
 一 あやするといふあやするあるをさへとむは我悪むを悔
 て教免を請ふをあやするといふは
 一 何とむべい行くべいあざとむへいの詞は源氏物語枕草
 紙に外古書あり今も田舎といふといふ詞ありべい
 一 倉子といふの字はキといふ五音通じおと云るをいふ
 一 ち也江戸の人と田舎者のべいと云詞を笑ふは
 一 お志やるといふは作あるの異語おとも志やるといふは

又同をよけよ
こころあへいおと
のこころ

しあひの畧語こころあひと云ハ決意あるの畧語之等古
風の御心今も田舎まいかやうの御残事たり

いづれと云ハ用事あきむむるを云ハ今ハ悪事をすも

るをいづと云ハ氷之徒の言イタラと云むし

けうかると云御古の書あり真があるの畧語之

真が^{ミヤウガ}あき又おかけあきあどと云御のあきと云ハ其の心ま

てハあらず真がある^{オホテ}大あると云る也

しものもと云ハ志うどくる也^{ルとキ五音通じりヒ}器の字之草字と云ハ其と

書之^{器ノ字シリヅク}器ノ字シリヅク^{マカルヤトも}器ノ字シリヅク^{キ五音通じりヒ}器ノ字シリヅク

所を退くと古き書ハ大和^{ヒアヤウ}もつる何づの汗ハ

まのりたるあどと云ハ我家を退て行心之いづれを

すありヤと云も云を退て行心之いづれを

古ハ夜廻りも書入るあどと云ハ其の

也^{原氏抄}原氏抄^{ヒアヤウ}ヒアヤウ^{ヒアヤウ}ヒアヤウ也と江戸

火の用心といひてあきと云ハ御心

面目^{メンボク}といひて古書ハいづれと云ハ其の

我子を愚息といひせがれといひて人品之記

我書を御心といひて人品の記

元興寺といひて小規をむす御心之系部ありと云

御心江戸といひていづれと云ハ其の

寺と云々寺よむけおありしおのりつとそ 元真寺の鬼出みし
るるの檻りんをり
侍るといふ御の儀と云と同一御也 奇出あまや
あま御也

見念と云ハ人のおのり集りて對面するもし又物を人
の見るもるもるも 見念よ入るも古の御也
げんごもるも

經營といふものを古書にけいめんとあつり 原氏物語
つれづれ
の教ふ經營といふ事をいふあひむし いふあひむしを
あつりのあひむし

さんざらふらふと云御のたゆとやうと云御也
如法といふ尋常と云は同一別は別なりたるもあま
そを無法は對して無法と云は無法の法をいふきたる也

意外と云ハおもんもりの不と修て思ひの外といふ御
リヨクワイ

ん今江戸と云無礼のりつと無邪といふハ非あり
無心と云ハ文字の通つてはなきと母むのふはあま
云ハ遠慮もあつ人の物をあつてもなきと村人の物
そらひむむをさむむと云ハあまのあつと云を思
き御也

計會と云御古書に何り計會と書てもうらひあハ
せりともむむ何りともあ品のり彼ともと云ハ
合せてもぬくと云はあちあひるを云へ

たの色ともおのり云ハ我が身のもこと江戸の御は
うぬと云ハおのと云御のあやむらうと云ぬれと云御

和漢朗詠集の
侍は今日不知
誰計會春風
春水一時未と
白居易が侍也
春風と春水ト
ケタル一時は来る
水云ハ一時は来る
ハ誰が計ひと
一時は風と水と
會合するやうふ

あつた知事
と云ふ

— ありまひと云ハ振舞とも奉勅とも書し人の身の
 ありまひと云ハ振舞とも奉勅とも書し人の身の
 をるまひと云ハあやまりえをれいありと云
 ありまひと云ハ又ありけとも云響意の二字を
 但響意をあるまひと云ハ馳をばると云むれ馳
 名の二字をせむと云ふと云て真まうけと云
 てありまひありと云ふありまひと云ふありまひ
 ありまひと云ふありまひと云ふありまひと云ふ
 ありまひと云ふありまひと云ふありまひと云ふ
 ありまひと云ふありまひと云ふありまひと云ふ
 ありまひと云ふありまひと云ふありまひと云ふ

半を云又何この役は借きると云ふも其役を貴人
 の有る勅を云ふ
 — 人は物を追はざるをあると云ハ此ありと云ふ
 畧語あり
 — 市志ある又あるあると云ハ此ありの轉語也
 此よりまひと云ハありまひと云ハありまひと云ハ
 壬生忠見の家集に初書ある人のひくれを元_得
 せん_有とありまひ_裏とありまひ_失とありまひと云ふ
 けまひと云ふと云ハ此ありまひと云ハ此ありまひと云ハ
 いまひと云ふと云ハ此ありまひと云ハ此ありまひと云ハ

一 ありがしつと云ふは又いふ所のいふと云ふは

一 びんあしと云ふは使と書て便字ありきりてと云ふ

一 己のハ我と云ふは我は己の人の身をさし

一 て云はれ又云はれと云ふは己の世の世の世

一 せんをいふはさうと云ふは目侍候

一 魁弱といふは旧記は是なり魁弱の字本多ハ延長

一 也千イサシともヤマヒトともよむ字之弱ハヨハシと

一 よむ字之病人あとのめくよいさをさし魁弱の官

一 人又魁弱の訴訟人あつていふ皆そ人威勢も

一 ありよいささささささ

一 ありらいつと云ふは礼の二字之無礼の事又病象の事

一 を志つらいつと云ふは礼例の二字之不例と云ふも同

一 事又病象の事つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志

一 ころいつの器器之

一 公家といふは法服の志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志

一 愚あつ人を馬麻者といふは志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志

一 志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志

一 志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志

一 志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志

一 志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志つらいつと云ふは志

初は努力トリコウの二字を用ひ努力とハカをのりて張つてけ
むるツルハ字ハ心よんハカを入心をもつてなるハ努
力の二字をつとりてとも云是又心を用てたるこなきこ
和歌あともいゆめと斗もよむこ

つらつと云詞ハ熟の字を書え情の字を用ハ誤也
未熟はあく念を入をつらつと云

尾オコ筋と云字を書えんビロウとよむゆ人云字元
かつ字の訓はかことよむる本はかことよむかこ
の者あつていふかこ之本字ハ嗚呼と云鳥呼とも
書え老学菴が筆記ハ曰蜀人見人物之可憐者

則曰嗚呼字彙ニ鳥見異則噪故以為鳥呼歎所
異也又盛囊抄應神天皇の御装束の裾と云物を
尾のゆ引き強ひつを戸の間はきこめ一耐尾筋と
物ありしよりそぐ浦を云ハ用るふたす目本紀も
名元ざるゆへ盛神天皇の御裾ハ云々

昔の俗語ハおの抱抱の字を支彦と云古書も元
たり支ハさつとよむ字ハ人の痒痒ある耐證候を
出してあつそか人の詞をさつとよより出る詞ハ
さくハ百りも支彦と云々
あり詞の借用あり

一 辰をひると云を古代ハあつすと云ひて古今若

集字拾遺物語などの古き物語はありしなりと
いふなりを尋るなり今世女の詞はあはれをすまふ云々
あり又源順が如名抄は放屁如名倍比流と有り
是本の詞也

一 ^{イニキヤツ}陰莖をまらうと云は近世の俗語はあはれは古代より
名は古今著聞集古事談字拾遺物語ホの古き
書にまらうとあり源順が如名抄莖垂類の類は玉莖
の二字を出して如名をば出さば牛馬跡の類は陰脈の
二字を出して俗に云麻良佐屋とあり如名は順の時代も
まらうと云ふ又今世の世にまらうの字をへること云は非也

和名抄は陰囊の二字を俗に布久利と記し陰核の
二字をバ俗に云馬跡の古と記したり陰核ハヒの世も云
まらう海の中のうらうらとこのうらうらと古ハ魚のこと
いひしはこれハ海らの津を魚のこと云ハ称遠之これ
らの名も有実有り何事も古今遠の事あり源
順ハ村上天皇の比代天曆年中の人古事後卷の二
保延五年四月廿五日郡馬部走り還テ引落敷頼冠
鞆不殘一物剥取其装束又車等同取之追放敷
頼拘其摩良走入小屋了又古今著聞集は完
取當たる摩良もはぐれられ又云一生不犯乃

尼陀終の時人念佛を勧めども念佛せざして摩
良がうろくと唱あぐる死をふまへ

一 人の安否を問ふ詞は貴人より沙様嫌能といひ上掌
小ハ比勇健といひを次より比堅勝といひ等掌より比
比堅固といひ下掌より比堅平といひて上中下の次
身を分るより自代より若くは若くは今の世の風俗にて
若のゆくゆく何者の始て定りしるるを石書
一 入眼ニラダシといふ詞をすし作り物事の成就をくらしるを入
眼といふあり是ハ画工の筆を塗りしり出るる詞之人形を
獸等を画づく時眼の中は瞳を然せざして彩色

こころしく終て後は眼中は瞳子を入れ之又本偶念ど
もま羽を作り彩色終て瞳子を入りし佛像は瞳子
を入れ并眼といふ是又入眼之これらありふ准づく
物事の成就をくらしるを入眼といふ

一 濫吹ランソイといふみづるに傷をいふるこ古より作り
書言故事下字
抄本よええり

一 香カウを嗅ぐカるを香を嗅ぐといふ是花のあはれりあり
かぐといふも残しき詞の何れより海女物語梅が元の
香タキの葉タキの葉タキといふいづくもちりつてむろくも香
をめれ人のむこよ合せありつるものさあはてをかき
ありせぬるよはけうあることおわりのきく香をかぐと

